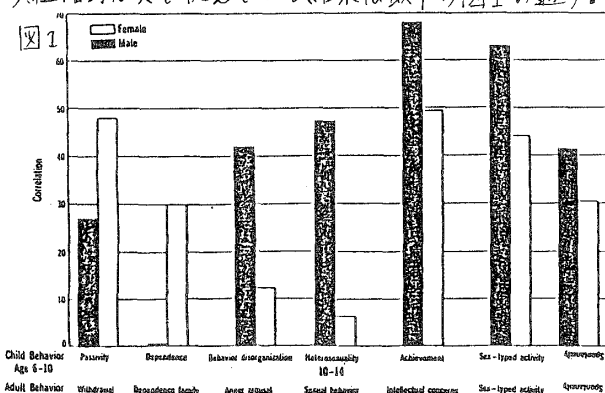


WISC-Rによる児童の性格診断の方法の研究 XXIX

— 性格における予測の問題 —

児玉省 渋谷伊津子 清水とも子 大村孝子(児玉教育研究所)

目的 幼児又は児童が将来どんな人格になるであろうかという問題は割合簡単に現在の子供が大体そのまゝの姿をつづけるか、又は多少変化しながらその姿をつづけるかという考えが一般的であった。しかし、こういう事をずっと追究した研究は少ない。これらの点についての研究で最も注目すべきものは、米国のオハイオ州, Fueleで行われた研究 *From Birth to Maturity* と、加州大学特にバークレーとオークランドで行われた *Guidance Study* ほか二つがある。Fuele研究では1929-1962年にわたる約30年間に誕生から成人までの被験者71名(男36名, 女35名)を追跡し、又加州大学では1928-1970年までの約40年間に追跡研究し、その後も60名(男30名, 女32名)を現在に至るまで追跡している。更に現在62名について継続研究を行っている。児童がその後現実的にどうなっているかという実際の資料は、この二つの研究しかない。追跡した多くの面のうち、性格的は表で捉えている結果は以下の図1の通り。



私達が本研究で目的としたのは、この二つの研究に於いて、とり上げられた角度を私達の調査対象に当てはめてみる事だった。その理由は、これらの研究は両者多少目的はちがうが、どちらも児童から成人へと比較するにあたって、いづれも継続した角度ととり上げているのである。私達もその角度を見本にして、同じ様な性格的角度即ち社交性(対人関係一般)、達成意欲(人生及び日常生活における推進力)、自からをコントロールする自我の発達に関係する自律性、その他自からのコントロールに関する集中力、対人関係に關係する柔軟性及び周囲をとりまく事物に対する神経質対大らかさ、これらの角度は子供が成人していく過程において、特にその発達変化の方向を示す重要な角度で、これが即ち、とり上げた理由である。Fuele研究では、6-10才までの児童が大体25才

になった時にどうなっているかを示すもので、6-10才の姿と成人した時の姿を対照的にとり扱っている。又加州大学では性格面でも特に精神衛生的な面での追求になつてゐる。子供は乳幼児期から発達するわけであるがFuele研究では6-10才を対照として、25才と比較する方法をとっている。これらを参照して、私達の対象児約330名について、後まで観察されやすい角度として、上記二つの研究が取り上げた角度を中心に、同様な角度を作成した。これらの角度からみた私達の対象児が6-10才と、その後15, 6才児との間にいかに関連があるかをみようとしたのが本発表である。

対象と方法 今までに教育相談その他でWISC-Rを実施した東京及び近郊の児童(6-10才まで206名, 10才以上16才, 123名の計329名)を対象にして、その子供達の日常生活の中で多く見られる行動や、テストの場で観察記録したものを参考資料とし、又Fuele研究等からヒントを得て私達独自の性格面を主として捉えた6項目からなる角度を作成した。Fuele研究では6-10才の児童が成人になつた時にどうなっているかという追跡研究を行ったのに対して、私達は同一児童を取り上げないで、多くの児童を対象にし、年令段階を10才までと10才以上に分けて、両者の間に何らかの関連があるかをみようとした。

角度項目は—1-A社交性(角度の内容として、友達が多い、外でよく遊ぶ、人なつこい、よく話をする、明朗など) 1-B社交性欠如(友達づきあいがよくない、人見知りをする、口数が少ないなど) 2-A達成意欲(がんばりや、テストに積極的、一生懸命考えるなど) 2-B達成意欲欠如(やる気はない、すぐに分かりませんと諦める、難かしい問題にぶつかると投げげるなど) 3-A大らか(のんびりしている、やさしい、気分が安定しているなど) 3-B神経質過敏(怒りっぽい、テスト時に緊張する、几帳面など) 4-A自律性(好きな事には熱心、自己主張が強い、自制心あり、しつかりしているなど) 4-B自律性欠如(依存的、甘えん坊、自主性に乏しい、過保護的など) 5-A集中力(塔着いてよく考える、よく集中するなど) 5-B注意散漫(そそっかしい、ミスが多いなど) 6-A柔軟性 6-B柔軟性欠如(物のみかたが一方向的、頑固など)の6項目である。なお柔軟性は角度項目として、資料が不十分なものであつたが項目に加えた。

結果と考察 取り上げた角度と出現率は図2の通

りである。各項目別に6-10才までと、10才以上16才児との間にどのような関連があるかをみていきたい。

1 社交性について—社交性ありは、6-10才までの子供で57%、10才以上で60%と共に出現率が高い。小さい時に社交性があると思われる子供は、それ以後も変わらないで、ずっと続く様である。10才前と10才後どちらにも、明るく、おしゃべりで、人見知りもなく、友達も大勢いて、元気な子供像がみられる。これに対して社交性欠如では出現率は社交性ありの約1/2になり、10才迄で26%、10才以上で28%と、いづれも低い。友達づき合いが消極的で、口が重く、引込み思案である等社交性に乏しいと思われる子供はその染をそれ以降もそのまま持ちつづけるようである。現代の子供については、ここでみられる様に社交性に富んだ活発な子供が多いように思われる。これも子供ととりまく環境、家庭などの影響によるところが大きいものと考えられる。

2 達成意欲について—達成意欲のある子供は10才迄で40%、10才以上で53%と、いづれも高く、社交性ありと同一傾向を示す。達成意欲は低年齢時から持ち合せており、年齢が進むにつれて、多少増加しながら続くものと思われる。知育偏重の今の時代の中で、学校家庭等まわりの環境から子供自身が自然に身に付けてしまったものであろう。やる気がある、がんばりや、テストに積極的などが年齢段階に関係なく、かなり多くみられる。達成意欲欠如は6-10才迄の子供の方が高い。角度の内容をみると、すぐ分りませんと、あつさり諦める、テストがむづかしくなると投げやうが多くみられ、10才以後は減少する。

3 大らかについては、10才前と後では余り変らない。神経質であると思われるものは、10才以下に多く見られ、それ以後は減少する傾向を示す。6-10までの子供の中には神経質、おこりっぽい、臆面等が多い。

4 自律性について—自律性のある子供は、6-10才ま

で20%、10才以上で39%と、10才以上の方がかなり高い。自己管理、自律心、責任感等は年齢と共に育っていくものと思われる。自律性欠如は逆に6-10までの子供の方にかかなり多くみられ、それ以後は著しく減少する。甘えん坊、依存心がある、過保護的などは、10才以下の子供により多くみられる。

5 集中力ありについては、6-10才まで、10才以上、共に出現率は約45%と高い。集中力は低年齢からすでに持っていて、これがそのまま続いているようである。注意散漫についても集中力と同様子供の性格的なもので、低年齢時に落着きのない子供は、成長しても、そのまま続くようである。

6 柔軟性あり、柔軟性欠如については、充分な資料を得ることが出来なかったので、図を参照していただきたい。

まとめ 6才-10才までと10才以上16才までに分けて、上述したような性格傾向を発達的に比較してみた。この理由の一つには、Fusco研究の6-10才を踏襲したものであるが、実はこの10才前と10才後は、青年期という性格的、身体的に激しい変化を伴う時期であるのに鑑みて、かなり両者間には性格的特性において、変化があるものと期待した。しかしながら私達の取り上げた6つの角度を10才前と後に分けた、この図2からは殆んど差はないことを見出した。ただし自律性だけは別である。この事は私達にとって大きな理論的暗示を与えるものである。人間がお互に関係し合う率及び人間を推進する基本的角度として取り上げた、これらの角度は思春期を継続してなお大体において、変化しないことを示した。これは私達にとって重大な資料であって、児童期から、あと青年期を通じ、更に初期成人期へと成長発達する姿を描くための重要な角度として、取り上げ得ることを示すものである。これらの6つの角度或は12の角度は、人間の発達変化の推進力又は環境とのかかわ

りの姿として、取り上げたものであるが、これらの角度は青年前期と後期を継続していることを見出したのである。

反省 私達の調査の見解と考察については、上述した通りであるが、研究方法については多少問題がある。社交性といふ、その内容がいかなるものと包含するかという問題で、これらについては、更に今後の検討を待ちたい。又これらの内容を幼児及び周囲の人達から聞きとるに当つての方法などは更に一層の精密化を試みたい。

